

フィールドワーカーによる「使い倒し」方

重富 真一

「重富さんは（図書館の）ヘビィユーザーだったの」というのが、連載担当者からのメールに書かれていた執筆依頼理由であった。じつは、私は昨年三月まで三〇年近くアジ研に勤めており、その末期になると、時々図書館員から同じ言葉を聞かされていた。しかし「ヘビィユーザー」といわれると、少々戸惑いを感じる。

本連載には、希有な資料をアジ研図書館にみだし、それをむさぼり読む喜びを語る碩学がしばしば登場するが、私はそうした「使い倒し」方をしたことがない。私の専門はタイの農村社会研究であり、そのコアになる資料は、自分の足で集めたインタビュー記録なのである。

「ヘビィユーザー」という誤解が生じたのは、私が毎日のように図書館に現れたからであろう。夕方五時頃になるときまって図書館に行き、タイ語と英語の現地紙を一部ずつ借り出し、自宅で読んで、次の日に返却する。それを毎日繰り返す。だから私は、「ヘビィユーザー」というよりも「ルーチンユーザー」。いわば、毎日同じ時間に同じ場所であつて「犬を散歩に連れていくオジサン」に過ぎないのであつた。それが昨年四月からできなくなった。ほぼ毎日、三〇年間繰り返してきたことができなくなると、まず体調に異常をきたす。そしてあの頃を思い出したのである。毎日毎日、新しい新聞を広げて、タイの動静と香りを、現地と数日しか遅れるこ

となく感じることでできた、幸せな日々を。

実際、現地紙というものは、地域研究者の基礎体力を作り出す「穀物」である。私のフィールドワークは、調査地で得られた情報だけに支えられていたのではなく、調査地の背後にあるタイ社会の理解があつて可能になった。逆に新聞が伝える情報は、フィールドワークで得られた情報とつながったときに、私なりの理解が可能な情報になった。こうした現地紙を「これでもか」といわんばかりに集めて開架している図書館は、おそらく世界に二つとないであろう。

新聞が置かれていたのは図書館一階なのだが、私は上の階にもよく行った。タイ資料のコナーに行くのはむしろまれで、もっぱらさまよつたのは他の国に関する文献の書架であつた。この点も、私が「ヘビィユーザー」と呼ばれることに一種の当惑を感じる理由である。

なぜタイ以外の国のところに行くのか。これは私の研究スタイルと関わるのだが、はじめひとつの村に住み込んでその村の全戸調査（いわゆるコミュニティ・スタディ）をしたあと、他の村はどうなっているのだろうと思ひ、村々を回り始めた。何年かあとにタイ村落の全体的なイメージができたとき、今度は他の国はどうなっているのだろうと思ひ始めた。実際にタイ以外の農村を垣間みる機会が与えられると、自分がタイで作った分析視角を当てはめてみる。そ

して、あてはまらないところがあると、「おもしろい！」とからだが震えるのである。フィールドから帰ってくると、さつそくアジ研の図書館に行く。その書架には、どの途上国についても豊富な資料が置かれている。それらの資料は、私がフィールドで得たアイデアをもとに空想を膨らませる支えになる。

だから私にとってアジ研図書館は、研究材料の宝庫というよりも、私の研究を幾重にも取り囲んで保護してくれる布団のようなものである。地面を歩き回って仕事をする私を、つねにより大きな世界へとつないでくれる触媒である。

アジ研の内部にいた私は、それらの資料がどのようにしていまあるのかを知っている。アジ研創設以来、何百人もの研究者が現地を歩いて集めてきた資料がある。そのなかにはもはや現地ではみつけれない資料もある。つい先日、タイの初市場についての古びた資料をアジ研の本棚でみつけた。タイのコメについてはそれなりに研究してきたつもりであつたが、みたことのない文献だつた。それはタイのどの図書館にもないものである。とっさにアジ研の先輩数名の顔が目につかび、「ありがとうございました。あなたのおかげでこの資料を手に入れたことができました」と、心のなかで一礼したのだつた。

図書館員が集めてくる資料もまた、膨大である。アジ研の図書館員は、みな現地語を操り現地を歩く強者であり、その存在こそがアジ研図書館、いやアジ研自体の価値を高めていると思つてい

る。
（しげとみ しんいち／明治学院大学国際学部教授）